

主婦起業塾、開催!

「主婦パワーを社会で生かそう!」

子育てのこと、地域のこと、お料理や家事のノウハウ……改めて考えてみると、結婚や子育てを経験してから知つたことや学んだことは山ほどあります。そんな私たち経験者の「当たり前」が、今、社会で必要とされているようです。

今回は、近頃増えている「主婦起業」と、主婦パワーで実現した二つのすてきなプロジェクトを紹介します。



“かたつむり起業”が成功のコツ！

「主婦ならでは」の視点で、

楽しく、無理なく、ゆっくりと

「収入を増やしたい」「誰かの役に立ちたい」「社会とつながってみたい」
さまざまな理由で起業を考える主婦が増えています。

そして、社会には「主婦だからできること」もたくさんあります。

主婦パワーを社会で最大限に生かしてみませんか。



不景気と自己実現願望で
主婦起業家が増加

起業を希望する主婦が増えてきた要因は、大きく三つあります。一つ目は不景気で夫の収入が下がるなど妻が収入を増やすなければならなくなつたため、二つ目は家計における教育費の占める割合の上昇。子どもを塾や私立の学校に行かせるなどでより多くの教育費が必要となり、その分を妻が稼ぎたいという理由です。三つ目は“自己実現”を目標とするもの。起業したいという主婦の中には、バブル時代を経験している40代の人も多くいます。バリバリ仕事をした経験があると、家庭に入り“○○ちゃんのママ”



山口 朋子さん
やまぐちともこ●女性のためのネットスキルアップ塾「彩塾」塾長。(株)アップリンクス代表取締役。「主婦やママでもインターネットを活用することでお金を稼ぐことができる！」を信念に、インターネットを使った起業のノウハウを幅広く伝えている。小学6年生の娘を持つ母。
ブログ：主婦の起業は「かたつむり」で！
<http://ameblo.jp/up-links/>

山口朋子さん提案！

主婦起業成功のコツ

「かたつむり起業」

起業にチャレンジするとき、気をつけたい五つのポイントとして、山口さんが提案する「かたつむり起業」。五つのことに注意して起業を成功させましょう！

か→簡単の「か」

「ラクして」という意味ではなく「がんばらずにできる方法で」という意味。あれもこれもしなくては、と難しく考えるのではなく、努力することが苦にならず、「簡単」にできることが、自分の得意なことなのです。

た→楽しくの「た」

起業は楽しく、ワクワクしながらやりましょう。女性の起業では、特に楽しんでできるものを選ぶことが大事です。自分を、家族を幸せにするための起業ですから、楽しめないことをするのには本末転倒です。

つ→続けるの「つ」

失敗する機会は、実はそうあるものではありません。失敗があるとしたら、それは途中であきらめてしまうこと。続けていればいつか成功します。一人では続けるのが難しいときは、一緒に喜びあえる仲間を見付けましょう。

む→無理なくの「む」

楽しく続けるためには、「無理のない仕事」はとても大切。家庭をもつ主婦は、自分が自由に使える時間も限られています。最初から飛ばしすぎたり、無理な目標を課したりせずにゆっくり景色を楽しみながら進むのがコツです。

り→リスク少なくの「り」

最初から店舗をかまえたりするのではなく、まずはインターネットを最大限に活用。ITスキルを身につければ、ソーシャルメディアなどをを利用してお金をかけずに集客できます。パソコンが苦手な人は、ブログを書くことからスタート！

文／富永素子

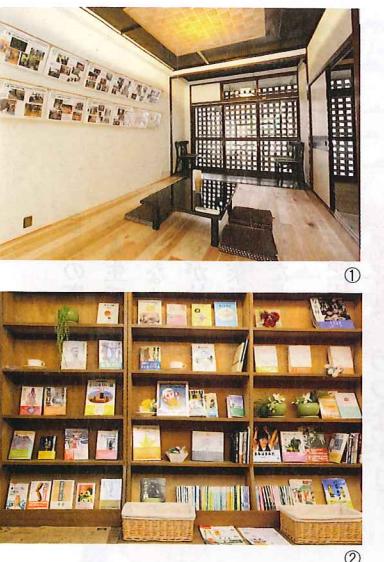
多世代が自然に集う 地域のコミュニティースペース

「さたけん家」カフェ

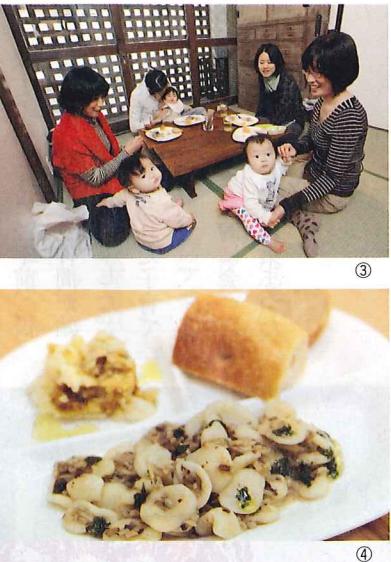
「地域に多世代が集える
場所を作りたいんです。
カフェはその手段」



設計・施工管理は地元の一級建築士がボランティアで、木材は奈良県吉野町の吉野木材若手軍団「team KASUGAI」が提供



①



③



④



⑤

①2階では地域の人による講座も開催。「寺子屋」のような場に
②本屋の雰囲気を残すインテリアがおしゃれ
③2階には畳スペースが。赤ちゃん連れのママもゆっくりランチを楽しめる
④ランチは週に数回の予定が「せっかく来てくれたおじいさんに申し訳ない」と、急きよ毎日に変更
⑤子どもたちがデザインしたクッキーは、福祉施設の「ブルーリボン」が焼いている

1 今まで一番大変だったことは?

一番大変であり、大切だと思っていることは「継続すること」です。このプロジェクトはたくさんの方の協力がないとできないけれど、協力してくれた人たちに金銭的メリットを与えることができません。なので、「参加してよかった」と心から思ってもらえるように努力しています。

2 事業をやってよかったと思うのはどんなとき?

協力してくれた方やお店に来てくれた方など、関わってくれた方が喜んでくれたときです。「人の輪」がつながっていくのを見ているとうれしくて「頑張ろう!」と思います。

3 資金や収入について教えてください

お店の改装費はアカデミー書房さんに援助してもらい、2年間はトヨタ財団から助成金が出ています。カフェの収入は今のところ売り上げの3分の1がその日働いたスタッフの収入、残りの3分の2が光熱費と材料費です。今はボランティアで成り立っているところも多いので、助成金が出ている2年間のうちに軌道に乗せなければと思っています。

4 うまく周りの人を巻き込むコツは?

巻き込まれた人たちには冗談半分で「水木被害者の会」とか言われています(笑)。このプロジェクトにみなさんが協力してくれるのは、「誰かのためになること」だからではないでしょうか。誰でも「愛他精神」を持っているのだと思います。

5 事業を始めて、家族の反応は?

中学生の娘は私の働き方を見て「お母さんがボランティアでやっている分をお金に換算したら今頃大金持つだろうね~」と辛辣なことを言いますけど(笑)。同級生同士で来られる場所ができてよかったと言ってくれています。小学生の息子も学校で私が作ったプリントが配布されるのを喜んでくれています。

に住むプロがボランティアで引き受けってくれました。水木さんの思いは、地域の人みんなの願いでもあったのです。

「1人では絶対できない。
でも、100人いれば
できるということを
子どもたちに見せたい」

オープン以来、カフェの評判は上々。20人の地元のお母さんたちが月1、2回の持ち回りでランチを担当し、木曜日には福祉施設「ブルーリボン」がカフェを訪ります。「元イタリア人」をふるまいます。元イタリアのコックと、若いお母さんが腕をふるう日があれば、年配の方のおふくろの味を楽しめ

るトモリ。地域の生活をみんなで楽しもう」というコンセプトのもとに生まれた地元住民によるプロジェクト。代表の水木さんがその一環として「さたけん家カフェ」のオープンを目指す」と佐竹台スマイルプロジェクト代表の水木千代美さん。

「佐竹台スマイルプロジェクト」とは、「地元の生活をみんなで楽しもう」というコンセプトのもとに生まれた地元住民によるプロジェクト。代表の水木さんはその一環として「さたけん家カフェ」のオープンを目指す」と吉野杉を使ったナチュラルなインテリアがおしゃれ。一見すると雑誌に載つていろいろなカフェですが、中をのぞいてみると

毎日昼ご飯を食べに来たり、おしゃべりに花を咲かせたりしているシニア世代、PTAの集まりの帰りにお茶する地域の母親グループ、赤ちゃん連れの若いお母さん、いろいろな世代が集まっています。

「近所の知り合いの家に寄るような場所を作りたかったんですね」と佐竹台スマイルプロジェクト代表の水木千代美さん。

吉野杉を使ったナチュラルなインテリアがおしゃれ。一見すると雑誌に載つていろいろなカフェですが、中をのぞいてみると

お母さん、いろいろな世代が集まっています。

「そのための一番の手段が“カ

フェ”だったんです」。カフェなら、働きたいお母さんに仕事の場も提供できるし、独居老人がお昼ご飯を食べにくることもできる。自然と多世代が集うのでは。

「そのための一番の手段が“カフェ”だったんです」。カフェなら、働きたいお母さんに仕事の場も提供できるし、独居老人がお昼ご飯を食べにくることもできる。自然と多世代が集うのでは。

「そんなことを周りのお母さんたちに話して、アカデミー書房のおばちゃんも、昔お昼ご飯を食べにくることもあります。自然と多世代が集うのでは。

「そのための一番の手段が“カフェ”だったんです」。カフェなら、働きたいお母さんに仕事の場も提供できるし、独居老人がお昼ご飯を食べにくることもできる。自然と多世代が集うのでは。

「そのための一番の手段が“カ

フェ”だったんです」。カフェなら、働きたいお母さんに仕事の場も提供できるし、独居老人がお昼ご飯を食べにくることもできる。自然と多世代が集うのでは。

「若い世代とお年寄りの中間にいる私たち世代ががんばれば何でもできる」と水木さん。

「それに、40代は男女雇用機会均等法の後の世代なので、働く意欲の高い人が多い。そういう人たちに子育てしながら無理なく活躍できる場所を提供したい」という気持ちもあります。さたけん家が、高齢化が進む街で、

水木さんの話を聞いた坂本さんは、「やつたらええ」と店の一部を提供、改装費を負担してくれました。

さらに公益財団法人トヨタ財團に助成金を申請したところ2年間の運営資金が受けられるこ

とになり、プロジェクトは大きく前進。店の設計や工事も地域

協力で、税金をなるべく使わない地域活性化のモデルケースになれるようがんばりたいです」

水木さんの話を聞いた坂本さんは、「やつたらええ」と店の一部を提供、改装費を負担してくれました。

さらに公益財団法人トヨタ財團に助成金を申請したところ2年間の運営資金が受けられるこ

とになり、プロジェクトは大きく前進。店の設計や工事も地域

協力で、税金をなるべく使わない地域活性化のモデルケースになれるようがんばりたいです」

水木さんの話を聞いた坂本さんは、「やつたらええ」と店の一部を提供、改装費を負担してくれました。

「若い世代とお年寄りの中間にいる私たち世代ががんばれば何でもできる」と水木さん。

「それに、40代は男女雇用機会均等法の後の世代なので、働く意欲の高い人が多い。そういう人たちに子育てしながら無理なく活躍できる場所を提供したい」という気持ちもあります。さたけん家が、高齢化が進む街で、

水木さんの話を聞いた坂本さんは、「やつたらええ」と店の一部を提供、改装費を負担してくれました。

さらに公益財団法人トヨタ財團に助成金を申請したところ2年間の運営資金が受けられるこ

とになり、プロジェクトは大きく前進。店の設計や工事も地域

協力で、税金をなるべく使わない地域活性化のモデルケースになれるようがんばりたいです」

水木さんの話を聞いた坂本さんは、「やつたらええ」と店の一部を提供、改装費を負担してくれました。

さらに公益財団法人トヨタ財團に助成金を申請

「求められたら、それ以上のことをやつてしまふ。それが『お母ちゃん』」

商店街の中にある「すきっぷ」は、親子で気軽に寄れる子育てスポット。子育て環境の充実と商店街活性化のために、徳島市から委託を受けた「NPO法人 子育て支援ネットワークとくしま」が運営しています。

部屋には、あらゆる年代の「お母ちゃん」がスタッフとして常駐。いつでも育児相談ができるほか、商店街の歯医者さんによる歯科相談会、講師を招いてのベビーマッサージなど、毎日のようにイベントが行われます。近所の親子はもちろん、わざわざ車を2時間走らせて通うお母さんや、孫を連れてやってくるお年寄り、夏には赤ちゃん連れで阿波おどりを見に来る観光客の姿も。

すべての始まりは22年前、松崎美穂子さんらママ友仲間が始めた子育てサークルでした。「期間限定で開催された子育てサークルで知り合ったママ友が、これからも定期的に会いたいねと団地の集会所に集まっています」

「普通のお母ちゃん」の集まりがいつしかNPO法人へ ～商店街子育てほっとスペースすきっぷ～

- ①商店街の中にある『すきっぷ』。『すきっぷ』は商店街の中のオムツ替えや授乳スポットとしても機能している
- ②徳島県産の杉をふんだんに使った室内は、外から見ても入りやすい雰囲気。親子がゆっくり過ごせるあたらしいスポットに
- ③本やおもちゃは、赤ちゃんの目線に合わせて低い位置に。お母さん向けの本も、赤ちゃんの世話をしながら座って探せるよう、あえて低いところに置いている
- ④お昼寝タイムが近くと、お布団が敷かれる。「子どもが寝ている間にお母さん同士おしゃべりを楽しんで」と松崎さん
- ⑤松崎さんがこだわっているのが『子育て情報掲示板』。子どもが寝ている間に常に情報収集し、壁いっぱいに掲示している

●起業HISTORY●



「昔は、台所でミーティングしてたのに、今はこんなにしてきな拠点ができる夢みたい！」



1 今まで一番大変だったことは？

お手本もなく、最初から自分で形を作っていくのが苦労しました。でも、初めて作り上げる喜びと楽しさがあったので、大変とは思わず楽しんでいたように思います。

2 事業をやってよかったと思うのはどんなとき？

出会ったお母さんたちが、最初は暗く悩んでいた様子から笑顔になり、ママ友ができ、元気な様子を見ることができたとき。お母さんが笑顔になってくれる瞬間がうれしいですね。

3 資金や収入について教えてください

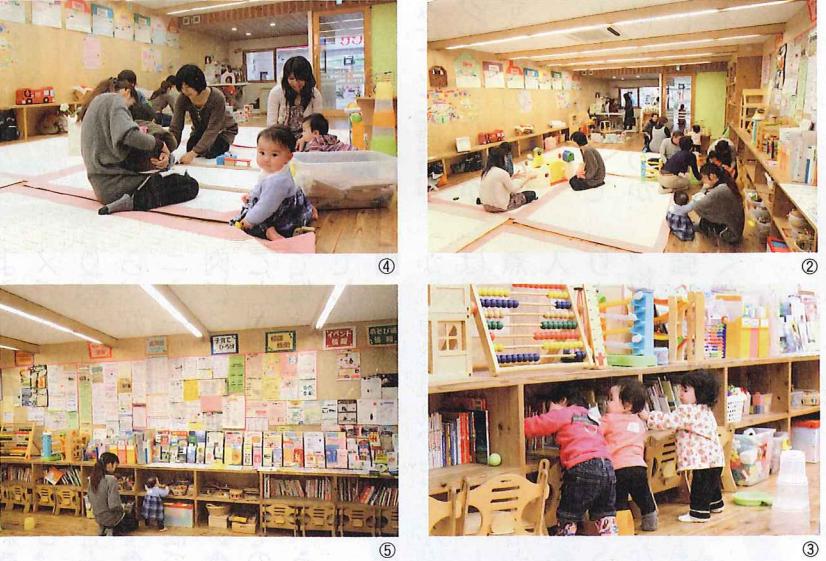
NPO法人になるまではほとんどボランティアで、お金に余裕がない中でやっていました。一時は辞めてしまって、フルタイムで働きに出ようかと思ったこともありますよ。NPO法人になつて給与も入り、スタッフも安定し活動できるようになってよかったです。今でも依頼された人数以上のスタッフを配置し、サービス面で満足いただけるように、やり過ぎてしまう。それが当事者である「お母ちゃん」ならではなのかもしれませんね。

4 うまく周りの人を巻き込むコツは？

あちこちに顔を出すことかな？ 県府や市役所で委員会があると、いろんな課をまわってちょっとあいさつしたり、飛び込んでいく勇気が必要かもしれません。22年も活動していると、相手がすごい役職の方でもずいぶん以前にお会いしていて気軽にお話し able ことが多いです。長く活動することも「1人の母ちゃん」の話を聞いてくれる味方を増やすコツでしょうか。

5 事業を始めて、家族の反応は？

家族と共に作っていったという感じです。情報誌の作成では、男子トイレのおむつ交換台やベビーキープの状態を息子が調べてくれたり、書店に行っては娘が、「お母さん、『Enjoy!ママ』が隠れていたから見えるようにしてきたよ」と。そして、運営方法で壁にぶつかったときに相談するのはやっぱり夫でした。冷静に判断してくれて助かりました。



とはいって、子どもの教育費がかかるところは、活動をやめてパートに出ようか迷ったこともありますよ。『ほとんどボランティアだったの』で、夫は大変だったでしょう。でも続けられてよかったです。最初はただの素人のお母ちゃんの集まりだったのが、22年続いた今は子育て支援の講師として呼んでいただき、講演させてもらったり、「すきっぷ」という拠点も持つことができました。お母ちゃんたちのパワーはすごいですよね」

今後の課題は「自立」だそう。『『子育て支援ネットワークとくしま』は、ずっと続いてほしいと思っています。今はまだボランティアでやっている部分も多いですが、私たちが引退して次の人へ引き継ぐには、もう少し自立していくなくては。今後は、乳幼児ママ向けの防災マニュアルの作成など、お母さんと子どもたちのためになる事業を企業などに提案していきたいですね』



文／わかはら真理子 写真／武田憲久